

1月早々佐賀大学で、塚本一郎助教授他のNPO論連続講義とのかかりで、実践家の立場から「高齢者協同組合の挑戦」と題して学生100余人に講義をする機会に恵まれました。

単位に入る講義ですから学生は真面目でレジュメと講義のポイントを逃さない見事な感想文を所定の枠内によどみなく一気に纏めていました。労協での鉛筆をなめながら苦労してもなかなか書ききれない姿に慣れている目からは実に見事なものです。

その感想文では高齢協を初めて聞くという人が多く、「高齢社会にとって大切な運動」、「貴重な運動だ」と書き、「高齢と死」を考え、自分の家族や自分の将来に引き寄せて実感を込めた思いを記したものが多く、話してよかったと思いました。

「これまでの授業の中で内容はともかく一番話し手の意思が伝わってきた」という感想があり、自分なりに気合を込めて話した甲斐があったのと「疑問がある」とした率直な感想には思わず苦笑しました。私自身17～8歳の頃「何故だ」「おかしい」を連発し、好き放題して困らせた教頭から、卒業式で「ほっとした」と言われた方です。百人中ひとりだけでしたが、若者の世界はいつの時代も変わらないことを知って「ほっとして。よし、もう一働き。」と元気づけられました。

「ひとつの法と制度が消滅していくとき、その廃止に反対する闘いを通じて新たな法制度を求め社会的根拠を自ら作り出し社会的に有用なものとして広く「合意賛同」を形成していく取り組みを、人的・経済的に可能とする事業を伴ってすすめる運動」と要約し年表を添え、歴史の特徴を5点に絞って話したのですが「発想の深さに驚いた」と受け止めてくれた感想もありました。

「他流試合」で外部でも結構話しているのですが、若者相手のこの初めての経験で、改めて「元気な高齢者がもっと元気に！」「寝たきりにならない！しない！」としたスローガンと「生きがい、就労、福祉の三本柱」が持つ、世代を越えた力強さを確信しました。

21世紀は100年続く少子・高齢社会、暗くて絶望的か。と問いかけ、川柳「粗大ごみ、朝出しても夜帰る」(沖縄高齢協平田先生)「特養施設で母が死にたい死にたいと言う」(自治体関係者との懇談で)

「元気なひとり暮らしの高齢者の寂しさが分かるか」「高齢者が問題なのか」、川柳「高齢者、死んでください国のため」など体験で得たことの紹介は、高齢社会を論ずる文章や資料には慣れている学生にも強いインパクトを与えたようです。

現実を直視しつつ、明るく展望をもって活動する幾つかの取り組みとして「第9合唱団」「岡山の高齢者主張大会」にみる感動の紹介には世代を超えた共感を得られたと思います。

介護保険制度が始まって約1年になります。この間、労協センター事業団は厳しい「経営危機」の中にありました。

極度の財務悪化で「墜落」もありうる「超低空飛行」を余儀なくする事態に联合会本部も責任を共にして、新たな大規模な挑戦である福祉分野を含む運動・事業を旺盛に推進しつつ原因の解析と対策をすすめました。そんな最中に「講義」の話を戴き、半年後を見通せない状況が本当のところでした。

介護保険制度が介護の社会化をはかるべく「措置から契約」「地方分権」へと、社会の枠組みが大きく変わる流れの中で労協・高齢協も地域に根をはった運動・事業へと活動の変革が必要な時期とも重なって事態は進行しました。

重層的な課題に新しい協同組合として挑戦し突破していく気迫と能力を要求されました。理念としての「新しい福祉社会の創造」「非営利・協同」の立場の貫徹、それを具現化する「協同労働」「生きがい」「助け合い」の発露が決定的に重要でした。労協運動の歴史上最も力のいる局面に遭遇したと思います。当然と言っではいけないかも知れませんが、各種の「私物化」現象も現れそれとの戦いが起こり組織を鍛えています。

労協センター事業団は、この厳しい事態に役員を先頭に真正面から立ち向かい、約1年で事態を脱け出す手ごたえを掴みました。実に貴重な経験でした。飛躍を目指す新3ヶ年計画づくりの作業がすすみ、その一環として設けられた協同組合資本形成検討委員会による「経営危機は何であったのか」の解析も纏められ、新たな前進が始まりました。

厳しい局面でした。修羅場でもありました。私は、この間、二つの禁句（「疲れた」「忙しい」）を自らに課しました。

こんな背景をもつての講義だったので、まとめを、若い人たちへの呼びかけと自らを鍛える意味で「協同組合人たらん」におきました。

世界的な協同組合人であるW・P・ワトキンスさんは14年前に著作で「将来、状況が変わり一般の人々が福祉をさらに自分の力で手に入れることを学ぶようになれば、協同組合のかたちも今では思いもよらぬものにも変わるかもしれません」と先見しましたが、20世紀最後に高齢者協同組合が生まれました。21世紀の協同組合運動は、新しい協同組合を担う新しい協同組合人の養成を最重要課題としていると思います。